傷寒六經病変

杨育周 著

蔡 雄材
安井广迪 译

人民卫生出版社

（京）新登字081号

伤寒六经病变

（中日对照）

杨育周　著

人 民 卫 生 出 版 社 出 版
（北 京 市 崇 文 区 天 坛 西 里 10 号）
人民卫生出版社胶印厂印刷

787 ×1092 毫米　16 开本　37 印张　4 插页　840千字
1992年2月第1版　1992年2月第1版第1次印刷
印数：00 001—1 300
ISBN 7-117-01635-3/R·1636　定价：40.00 元

序

自从江户时代中期以来，《伤寒论》在日本作为汉方医学的最重要的古典著作就广泛流传，在临床上应用自不待言，更从各种不同的角度对其进行了大量的研究。其研究之历史甚为久远，在中国自金代的成无已著《注解伤寒论》以迄于近年，有很多的注释书籍相继问世。

日本的名古屋玄医读了喻昌所著的《尚论篇》之后，极力主张《伤寒论》研究的重要性，这是人所熟知的。1659年出版了日文版的《仲景全书》。这些都说明自十七世纪下半叶起，已逐步打下了研究的基础。其后，有一批被称为古方派的人们根据《伤寒论》开展了临床、研究工作。这些研究成果在现代的汉方医学中得到继承。

由此看来，无论在中国还是在日本，《伤寒论》都是不可或缺的重要古典著作，现在，在它的研究历史上又增添了新的一页。

本书《伤寒六经病变》的作者杨育周教授是一位《伤寒论》研究的后起之秀，不仅在中国，而且在日本也是广为人知的。本书是杨教授在其多年研究成果的基础上编著而成，以运用枢机的概念解释全文为其最大的特征。枢机是发源于《素问》的“枢”的概念，杨教授以此为《伤寒论》六经辨证体系的纲，作为贯穿于全篇的理论支柱。这是一个全新的观点，应予以高度评价。

本书以中文和日文对译的形式出版，这件事也是一个新的尝试，作为日中两国合作的成果，为今后树立了一个良好的范例，同时也可以说，为两国的研究工作者互相协作提供了一个极好的园地。我在此谨对承担翻译之劳的森　雄材和安井广迪二位译者表示深切的敬意，并将本书广泛推荐于中国和日本的汉医研究工作者。

北里研究所东洋医学综合研究所名誉所长　**矢数道明**

1991年12月1日

序

江戸中期以来，『傷寒論』は日本における漢方医学の最も重要な古典として広く用いられ，臨床的にはもちろんのこと，さまざまな角度から膨大な量の研究がなされてきた．その研究の歴史は古く，中国では金代の成無已の『注解傷寒論』以来，近年に至るまで数多くの注釈書が世に出されてきた．

日本の名古屋玄医が喩昌の『尚論篇』を読んで『傷寒論』研究の重要性を説いたのはよく知られているが，1659年に日本版『仲景全書』が出版されるなど，その研究の基盤は17世紀後半にすでに出来上がりつつあった．その後，古方派と呼ばれる一群の人々によって『傷寒論』にもとづく臨床・研究が展開され，その成果は現在の漢方医学に引き継がれている．

このように，中国においても日本においても，欠くべからざる重要な古典である『傷寒論』研究の歴史に，この度新たな１頁が加えられた．

本書『傷寒六経病変』の著者，楊育周教授は新進気鋭の『傷寒論』研究者として中国のみならず日本においても広く知られる方である．本書は楊教授が多年にわたる研究成果をもとにまとめられたもので，枢機の概念を用いて全文を解釈しているところにその最大の特徴がある．枢機は『素問』の「枢」より発した概念であるが，楊教授はこれを『傷寒論』の六経弁証体系における要（かなめ）として，全篇を貫く理論的支柱としておられる．これはまったく新しい視点であり，高く評価されるべきものである．

本書は中国語と日本語の対訳の形式で出版される．このこと自体，初めての試みであり，日中両国の合作の成果として今後によき範例を示すとともに，両国の研究者に共同で仕事をしていく格好の場所を提供したといえよう．翻訳の労をとられた森雄材・安井広迪の両氏に深甚の敬意を表し，本書を広く中国および日本の漢方研究者に推挙するものである．

1991年12月１日

北里研究所東洋医学総合研究所名誉所長
矢数道明

目　　录

上篇　伤寒六经病变概论

1　前言……2
1.1　六经辨证体系……2
1.2　“伤寒”的概念……8
1.3　六经疾病的概念和传变规律…10
1.4　有关气血水火的生理病理……20
1.5　枢机与枢机不利……40
1.6　表里先后缓急之治则……46
1.7　合病与并病……50
1.8　六经病欲解时……56

2　太阳病变……58
2.1　太阳部位的生理与病理特点…58
2.2　太阳病变的分型……62
2.3　太阳病变的治疗……80
2.4　针灸辨治提纲……88

3　少阳病变……92
3.1　少阳部位的生理与病理特点…92
3.2　少阳病变的分型……96
3.3　少阳病变的治疗……110
3.4　针灸辨治提纲……114

4　阳明病变……122
4.1　阳明部位的生理与病理特点…122
4.2　阳明病变的分型……130
4.3　阳明病变的治疗……140
4.4　针灸辨治提纲……146

5　太阴病变……148
5.1　太阴部位的生理与病理特点…148
5.2　太阴病变的分型……152
5.3　太阴病变的治疗……156
5.4　针灸辨治提纲……156

6　厥阴病变……158
6.1　厥阴部位的生理与病理特点…158
6.2　厥阴病变的分型……164
6.3　厥阴病变的治疗……176
6.4　针灸辨治提纲……182

7　少阴病变……188
7.1　少阴部位的生理与病理特点…188
7.2　少阴病变的分型……192
7.3　少阴病变的治疗……206
7.4　针灸辨治提纲……208

下篇　伤寒论解析

辨太阳病脉证并治上……218
辨太阳病脉证并治中……252
辨太阳病脉证并治下……346
辨阳明病脉证并治……402
辨少阳病脉证并治……478
辨太阴病脉证并治……486
辨少阴病脉证并治……492
辨厥阴病脉证并治……528
辨霍乱病脉证并治……570
辨阴阳易差后劳复病脉证并治……578

附：方剂索引……586

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

上　　篇

伤寒六经病变概论

1 前　　言

《伤寒论》是东汉末年张仲景所著，是我国第一部理法方药具备、理论联系实际的医学著作，对我国医学发展作出了重要的贡献，为后世医家必读之经典。尤其是《伤寒论》所提出的六经辨证体系，被后世医家奉为圭臬。

后世历代医家对《伤寒论》的研究，为我们学习《伤寒论》打开了大门，给我们研究《伤寒论》留下了丰富资料。但由于历史的局限，他们虽为《伤寒论》的解明，作出了巨大的贡献，但因《伤寒论》内容深邃广博，其中仍多未解之谜。故对《伤寒论》的丰富内容、伟大学术价值、以及其对后世医学发展的深远影响，至今仍是祖国医学重要的研究课题。

历代研究《伤寒论》的文献十分宏富，由于其所用术语的内涵不一，概念内容有异，而常为研究探讨理解困惑之由。故为了便于说明，以有助于对原文的理解和对仲景学术思想的研究，首先对以下几个问题予以探讨。

1.1　六经辨证体系

辨证就是将望、闻、问、切四诊所收集的各种资料，根据它们内在的有机联系，加以综合、分析、归纳、对疾病进行辨识，即中医之诊断过程，从而依之确立治疗原则，选方用药。

由于致病因素不同，人体之素质各异，……发病后所见之病变也不同。为了更迅速、更准确、更简捷地认识疾病，从而使疾病得到正确、及时的治疗，祖国医学在数千年的发展中，创立、总结出了许多切合临床实际的辨证方法。如八纲辨证、脏腑经络辨证、六经辨证、营卫气血、三焦辨证、气血津液辨证……等辨证方法。其在临床应用中各有侧重，各具有自身的特点。六经辨证就是祖国医学诸多辨证方法之一。而这些各有特色的辨证方法，在临床实践中又都是互为联系、互为补充，而不能相互取代。

六经辨证体系就是以六经辨证为核心，结合八纲、脏腑经络、营卫气血、三焦、气血津液等辨证方法，对风寒之邪侵袭六经所引起的各种病变的辨识方法和施治准则

1.1.1 六经

1.1.1.1　六经的概念

六经就是指太阳、少阳、阳明、太阴、厥阴、少阴而言。六经即上述六者之所属脏腑及其气化功能所及，并通过经络与之相连属的部位。可以认为，六经就是以脏腑经络为中心，对人体的部位进行划分。

序 論

まえがき

『傷寒論』は後漢末年の張仲景の著作で，理法方薬を備え理論と臨床を結びつけた中国最初の医学書であり，中国医学の発展に重要な貢献を果たし，後世の医家必読の経典になっている．特に『傷寒論』が提示した六経弁証の体系は，後世の医学の規範となっている．

後世の歴代医家による『傷寒論』の研究は，われわれが『傷寒論』を学習するための大きな門を開き，豊富な研究資料を残してくれている．しかし，歴史的制限もあって，『傷寒論』の解明に大きな貢献を果たしてはいるものの，内容が深く広いために多くの未解決の謎を残している．それゆえ，『傷寒論』の豊富な内容や偉大な学術的価値，および後世の医学の発展に与えた深い影響などは，現在もなお重要な研究課題になっている．

歴代の『傷寒論』研究の文献は非常に多いが，使用している術語の意味が同じではなく，概念の内容も異なっているために，研究し検討して理解するうえで，常に困難がある．そこで，説明に便利で原文の理解や仲景の学術的思想の研究に役立つように，まず以下の問題に対する検討を行う．

六経弁証体系

弁証とは，望・聞・問・切の四診で収集した各種の資料を，内在する有機的な連係にもとづいて総合・分析・帰納し，病変を弁識するもので，中医の診断過程であり，これにもとづいて治療原則を確立し選方用薬するのである．

発病因子が異なり，人体の素質にも差異があるために，発病後に現れる病変は同じではない．より速やかにより確実に簡便に病変を認識し，正確ですばやい治療を行えるように，数千年の医学の発展のなかで，臨床実践に適合した多くの弁証方法が総括されてきた．例えば，八綱弁証・臓腑経絡弁証・六経弁証・営衛気血および三焦弁証・気血津液弁証などの弁証方法である．臨床応用ではそれぞれに重点があり，おのおのが特徴をもっている．六経弁証も多くの弁証方法の１つである．それぞれの特色をもつ異なった弁証法は，臨床において相互に関連し補充し合うが，相互にとって代わることはできない．

六経弁証体系とは，六経弁証を核に八綱・臓腑経絡・営衛気血・三焦・気血津液などの弁証方法を結合して，風寒の邪が六経を侵襲して引き起こす各種の病変を，弁識する方法と施治の準則である．

1 六経

1.1 六経の概念

六経とは，太陽・少陽・陽明・太陰・厥陰・少陰をいい，それぞれに所属する臓腑およびその気化機能の及ぶ所ならびに経絡によって連なり属する部位である．すなわち六経は，臓腑経絡を中心にした人体の部位の区分とみなすことができる．

1.1.1.2 六经的层次

六经既系以脏腑经络为中心，对人体的部位划分，以其每个部位所居之脏腑经络、及气化功能所及之组织器官不同，各经具有不同的生理功能特点，从而构成了六经。因外邪所犯，其发病有深浅层次上的不同。如太阳主人体一身之表，为风寒外侵首犯之处；少阴主人体一身之里，风寒深入少阴为邪正相争生死存亡的最后关头。

外邪所犯，若正盛邪实，则邪在三阳，即太阳主表、阳明主里、少阳主半表半里；若正虚御邪无力，则邪得深入三阴。即因太阴与阳明同居中土，而为三阴之表；少阴为人体一身阳热之本源，是邪正相争生死存亡的最后关头而为三阴之里；厥阴与少阳为表里之脏，为阳热内布外达之枢纽，而为三阴之半表半里。故六经之层次摆位，当为太阳、少阳、阳明、太阴、厥阴、少阴。

1.1.2 六经辨证

1.1.2.1 六经辨证的提出和概念

六经是以脏腑经络为中心、对人体的部位划分，即六经中每一经，都包括有其所属的脏腑经络，以及其气化功能所及之组织器官，而各具自身不同的生理功能特点。由于外邪所犯，可因其受邪性质、受邪途径、受邪部位不同，即由于被侵袭部位之生理功能被干扰，人体因此所产生的病理改变不同，而有不同的形诸于外的病变表现。六经既系人体之六个不同的部位划分，外邪所犯，邪正相争所形诸于外的证候特点，也就随之各异，而临床上也正是通过这些不同的证候的辨识，而为治疗提供依据。可以认为六经辨证就是根据外邪所犯，邪正相争于各经，所形诸于外的病变表现，进行综合、分析、归纳以确定六经的病变部位、证候特点，为临床辨治提供依据。

1.1.2.2 六经辨证是《伤寒论》针对风寒外侵所创立的最相宜之辨证纲领

六淫邪气各具有自身的致病特点，即由于感受外邪不同、受邪途径不同，而决定了其受邪后，邪正相争所导致的病变及传变特点不同（如感受暑邪，以暑性炎热，自中气分，不挟他邪则无表证，且损伤气阴至甚；温热之邪则邪从上受，首先犯肺；湿热之邪，则受自口鼻，直走中道；风邪则伤外伤上，伤人皮毛，其性轻扬，若不挟他邪则无传变）。

就风寒之邪之致病特点而论，风邪则以风为阳邪，化热迅速，其性轻扬开泄，伤外伤上；寒邪则以寒为阴邪，伤人阳气，寒则收引，寒则气收，伤外伤下。故可知风寒之邪侵犯人体，其受邪途径是邪从表外而受。即始自皮毛肌肤，由表入里，而与其他外邪之受邪途径不同。《温热经纬》引沈尧封云"邪气中人，所入之道不一，风寒由皮毛而入，故自外渐入里，温热则由口鼻而入……"，可谓言简意明。就《伤寒论》中受邪发病而论，虽云为风寒所犯，实是以寒邪为主，主要体现着寒邪的致病特点，因其挟有不同程度的风邪发病而风寒并称。

以上从六淫的致病特点上分析，可知风寒之邪侵犯人体，决定了其首犯皮毛肌肤，

1.2 六経の階層

六経は臓腑経絡を中心にした人体の部位の区分であり，それぞれの部位に所属する臓腑経絡とその気化機能が及ぶ組織器官の違いにより，各経が異なった生理機能の特徴をもち，それによって六経を構成している．それゆえ，外邪が侵犯して発病する場合に，深浅という階層上の違いがある．例えば，太陽は人体一身の表を主り，風寒が外侵して真っ先に犯す部位であり，少陰は人体一身の裏を主り，風寒が深く少陰に入ると，邪正相争により生死存亡が決まる最後の分かれ目になる．

外邪が侵犯し，正盛邪実を呈するときは，邪は三陽にある．すなわち，太陽は表を主り，陽明は裏を主り，少陽は半表半裏を主る．正が虚し邪に対する抵抗が無力になると，邪は深く三陰に入る．太陰は，陽明と同じく中土にあり，三陰の表である．少陰は，人体一身の陽熱の本源で，邪正相争における生死存亡の最後関頭になるので，三陰の裏である．厥陰は，少陽と表裏をなす臓で，陽熱が内布し外達する枢紐（かなめ）であり，三陰の半表半裏である．以上からわかるように，「六経」の深浅という階層上の順序は，太陽・少陽・陽明・太陰・厥陰・少陰となる．

2 六経弁証

2.1 六経弁証の提示と概念

六経は臓腑経絡を中心にした人体の部位の区分であり，六経それぞれの「経」は，所属する臓腑経絡およびその気化機能の及ぶ組織器官を包括し，特有の生理機能をもっている．外邪が侵犯すると，邪の性質・侵入経路・侵襲部位などが違い，侵襲を受けた部位の生理機能が擾乱されるために，人体に生じた病理的変化が異なり，外面に現れる病変の症候も異なる．

六経は人体の6つの異なった部位の区分であり，外邪が侵犯し邪正相争により外面に現れた症候の特徴もそれぞれ違っているので，臨床ではこれらの違った症候の弁識にもとづいて治療するのである．すなわち六経弁証とは，外邪が侵犯して各経で邪正相争するときに，外面に現れた症候にもとづいて総合・分析・帰納し，六経の病変部位と症候の特徴を確定し，治療の根拠にするものである．

2.2 六経弁証は『傷寒論』が風寒外侵に対して創立した最も適切な弁証綱領である

六淫の邪気はそれぞれ発病上の特徴をもつので，感受した外邪や侵入経路の違いにより，その後の邪正相争による病変および伝変の特徴が異なる．例えば，暑邪は，暑は炎熱の性質をもつために気分に直中し，他邪を伴わなければ表証を表すことがなく，かつ気陰を損傷することが最も甚だしい．温熱の邪は，上から受けて真っ先に肺を犯す．湿熱の邪は，口鼻から受けて中道に直走する．風邪は，外を傷り上を傷り皮毛を傷り，性質が軽揚であるために，他邪を兼挾しなければ伝変しない．

風寒の邪の発病上の特徴は以下のようである．風邪は陽邪で化熱が速く，性質が軽揚開泄で外や上を傷り，寒邪は陰邪で陽気を損傷し，収引の性質があって気を凝収し外や下を傷る．それゆえ，風寒の邪が人体を侵犯する侵入経路は表外からであり，すなわち皮毛肌膚から始まり表から裏に入る．これは他の外邪が侵入する経路とは異なっており，『温熱経緯』は沈堯封を引用して，「邪気の人に中(あた)るや，入る所の道は一ならず，風寒は皮毛より入る，ゆえに外より漸(ぜん)に裏に入る，温熱はすなわち口鼻より入る……」と簡明に述べている．『傷寒論』における受邪発病は，風寒の侵犯とされてはいるが，実際には寒邪が主であり，主に寒邪の発病上の特徴を表している．ただし，程度の異なる風邪を兼挾して発病するために，風寒と称されるのである．

以上のように，六淫の発病上の特徴を分析すると，風寒の邪が人体を侵犯することが，次のことを決定していることがわかる．まず皮毛肌膚を犯して表から裏

由表入里，即受自于肌表，由表向里深入传变的发病、传变规律的特点，也决定了其病变过程中必然有个表里层次深浅的不同，故六经辨证也就成了外感风寒、感而即发的最宜辨证纲领。

1.1.3 六经辨证体系

1.1.3.1 六经辨证体系的提出

人体是一个以脏腑为中心、通过经络把全身连系在一起的整体，即包括气血津液等基本物质所构成的统一的整体。

在邪入六经，邪正相争的过程中，必然会对全身各个部位，对气血津液等基本物质，带来直接或间接的不同程度的影响，甚至累及发病。而这些受累继发之病理变化，必又使六经病变更加复杂多变。因此，对六经病变的认识，必须以六经辨证为中心，并综合其他辨证方法，从而在临床上，对六经病变的发病、证治、传变才能有一个准确、详细的辨证方法和提出切实可行的治疗准则。

1.1.3.2 六经辨证体系的概念

六经辨证体系既是基于临床对风寒外犯、邪正相争所致六经病变辨识和治疗所需要的辨证方法和施治准则，那么，除要辨清六经的发病部位外，还需要借助于八纲辨证方法，以明确六经病变的阴阳、表里、寒热、虚实。即在六经辨证的具体运用中，贯穿着八纲辨证的内容。再者，六经既为以脏腑经络为中心，对人体的部位划分，引申之，六经证候的产生，其中一部分就是因邪正相争干扰了脏腑的生理功能所致。换言之，六经病变的许多方面，都要借助于脏腑经络的辨证方法，以对六经病变的表现和内部联系，得以更加具体准确的辨识。又如，还需要借助于六淫辨证的方法，以突出风寒的致病特点。又如，在其病变过程中，必然会累及气血津液等人体的基本物质，而使病变表现不同，而这些不仅是临床赖以辨证的依据，而且又是辨知导致病情变化的重要因素，故又需要借助于气血津液辨证的方法，以说明六经病变邪正相争的特点和病情传变的物质基础。总之，由于六经病变的错综复杂和多变，出于临床的需要，故《伤寒论》提出了较完整的六经辨证体系。即六经辨证体系是以六经辨证为中心，结合八纲、脏腑经络、气血津液……等各种辨证方法，对邪犯六经所引起的各种病变的辨证方法和施治准则

1.1.3.3 六经辨证体系的意义

六经辨证体系是对外邪侵犯人体后，根据人体抗病力的强弱、病因的属性、病势的进退缓急等因素，将外感疾病在其演变过程中所出现的各种证候进行综合、分析、归纳，从而明确其病变之部位、证候特点及其所累脏腑、经络、组织器官、气血津液等之受累状况，以及邪正消长、寒热趋向及转化等，而为临床治疗提供依据，即依此确立治法，依法选方用药。因此《伤寒论》中所提出的六经辨证体系，既是六经病变的辨证纲领，又是施治准则。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に入り，すなわち表外に受けた邪が表から裏へと深入し伝変するという発病と伝変の特徴を決め，病変の経過において必然的に表から裏へという階層上の深浅の順序も決定しているのである．それゆえ六経弁証は，外感風寒で感受してすぐに発病する場合に，最も適切な弁証綱領になっているのである．

3 六経弁証体系

3.1 六経弁証体系とは

人体は臓腑を中心に経絡によって全身が連係されている整体であり，気・血・津液などを包括した基本物質で構成された統一体でもある．

邪が六経に侵入して邪正が相争する経過においては，全身の各部位や気血津液など基本物質に，必然的に直接あるいは間接に程度の異なる傷害をもたらし，甚だしければ発病に至らせ，これに継発する病理変化が六経病変をさらに複雑多変にする．それゆえ，六経病変を認識するうえでは，六経弁証を中心にし他の弁証法を総合しなければならない．このことにより，六経病変の発病・証治・伝変が正確で詳細になり，適切かつ有効な治療法則が提示できるのである．

3.2 六経弁証体系の概念

六経弁証体系は，臨床にもとづいており，風寒が外犯し邪正が相争して生じた六経病変の弁識と治療に必要な，弁証方法と施治の原則に相当する．それゆえ，六経の発病部位を弁明する以外に，八綱弁証の方法によって六経病変の陰陽・表裏・寒熱・虚実を明確にする必要がある．すなわち，六経弁証を具体的に運用するうえでは，常に八綱弁証の内容が関与しているのである．また，六経は臓腑経絡を中心にした人体部位の区分であるから，六経の症候の一部は，邪正相争が臓腑の生理機能を擾乱したために発生する．すなわち，六経病変の多くの面で臓腑経絡の弁証方法を借りる必要があり，これによって六経病変の症候や内部の関連がより具体的かつ正確に弁識できるのである．さらに，六淫弁証の方法を用いて，風寒の発病上の特徴をより明確にすべきである．このほか，病変の経過では必然的に気血津液などの基本物質に影響が及んで症候が変化するが，これは弁証の根拠になるだけでなく，病状の変化を引き起こす重要な素因を知ることにもなる．それゆえ，気血津液弁証の方法を用いて，六経病変における邪正相争の特徴や病状の伝変における物質的基礎を説明する必要もある．

以上のように，六経病変は錯綜し複雑多変であるため，臨床上の需要にもとづいて，『傷寒論』は完備し整理された六経弁証体系を提示したのである．すなわち六経弁証体系とは，六経弁証を中心に八綱・臓腑経絡・気血津液など各種の弁証方法を結合し，邪が六経を侵犯して引き起こす各種の病変に対し提示された，弁証方法と施治の原則である．

3.3 六経弁証体系の意義

六経弁証体系は，外邪が人体を侵犯したのちの人体の抵抗力の強弱・病因の属性・病勢の進退緩急などの要素にもとづいて，外感病変が演変する過程に出現するさまざまな症候を総合・分析・帰納し，病変の部位や症候の特徴，関係する臓腑・経絡・組織器官・気血津液などの障害の状況，邪正の消長や寒熱の趨勢と転化などを明確にして，治療上の根拠を示したうえで治法を確立し，治法にもとづいて選方用薬するのである．それゆえ，『傷寒論』が提示した六経弁証体系は，六経病変に対する弁証綱領であり施治の原則である．

六经辨证体系既系是基于对人体脏腑、经络、组织器官、气血津液等各方面生理病理变化的认识而提出的，且又包涵了八纲、脏腑经络、六淫、气血津液等辨证方法之内容，所以六经辨证体系就有着极为广泛的内涵。掌握了六经辨证体系，即可具备在不同复杂情况下，找出病变一定的特点规律，从而谋求适当治法的能力，达到“观其脉证，知犯何逆，随证治之”的目的。

1.1.3.4 六经辨证体系的局限

六经辨证体系为基于临床需要，对风寒外犯，邪正相争所致六经病变辨识和治疗而提出的。虽风寒外犯所致六经病变，因有其自身的发病、传变规律特点，使六经辨证方法具独立存在的意义，而不能为其他辨证方法所取代；但绝不是说因六经辨证体系对临床各科都有着广泛的指导意义，而就可以取代其他辨证方法，即应认识到其局限性。

1.1.3.4.1 外邪致病，因六淫之致病特点不同，即因其发病、证治、传变特点各异，而各有其最宜之辨证体系。如感受温邪，则以其邪从上受，首先犯肺，伤津易生等，临床辨治当纳入卫气营血、三焦辨证体系。

1.1.3.4.2 风寒外犯，邪正相争，其治疗或去邪安正，或扶正去邪，总是以邪去正安为准则。而外邪犯体、邪正相争，却非临床疾病的唯一病变形式，如内伤杂病等。但就伤寒疾病而论，如其恢复期之脏腑、气血津液虚损待复，不一定有邪参与，而此等情况皆非六经辨证体系之所长。

1.1.3.4.3 临床各科疾病都有各自学科的发病、证治特点。如妇人之有经、带、胎、产；小儿之有麻、痘、惊、疳等病，临床辨治亦皆非六经辨证体系之所赅尽。

若此，六经辨证体系虽有广泛的临床指导意义，但不能执此而取代其他辨证方法，更不可无视其他各科疾病的发病、证治特点，不问有邪无邪，不究邪之属性、致病特点，一概纳入六经辨证体系辨治。当然，风寒外感，邪犯六经，如前所述，以六经病变有其自身的发病、传变规律，如被其他外邪所犯，则与其他各科杂证不同，故同样，六经辨证体系也不能被其他辨证方法所取代。换言之，这也是其能得以独立存在的根本原因。

1.2 伤寒的概念

《伤寒论》一书以“伤寒”二字命名，而书中又多见以“伤寒”二字冠首的条文，或以“伤寒”二字命名证型，所以在学习、探讨《伤寒论》时，首先应明确“伤寒”二字的含义，以避免概念上的混淆。

1.2.1 一切外感病的总称

参《素问·热论》：“今夫热病者，皆伤寒之类也”。

《难经·五十八难》：“伤寒有五：有中风，有伤寒，有湿温，有热病，有温病”。

《伤寒论》之命名，即系此广义所指。

六経弁証体系は，人体の臓腑・経絡・組織器官・気血津液など，各面の生理的・病理的な変化を認識することにより提示されるが，八綱・臓腑経絡・六淫・気血津液などの弁証方法の内容も包括しており，非常に広範な内容をもっている．六経弁証体系を把握すれば，どんなに複雑な状況下にあっても，病変のもつ一定の特徴的規律を探り出し，適切な治法を求める能力をもつことができ，「その脈証を観，何の逆を犯せしかを知り，証に随いこれを治す」という目的を達することができる．

3.4 六経弁証体系の限局性

六経弁証体系は，臨床上の需要にもとづいて，風寒外犯による邪正相争で生じた六経病変を弁識し治療するために提示されたものである．風寒外犯による六経病変は，特有の発病と伝変の規律をもつために，六経弁証の方法に独立した存在意義を与えているのであり，他の弁証法で代用することはできない．ただし，六経弁証体系が臨床各科に対し広範な実際的意義をもっていて，他の弁証法の代わりになるというわけではなく，以下のような限局性も認識しなければならない．

3.4.1 外邪による病変は，六淫の発病の特徴がそれぞれ異なっているために，発病・証治・伝変などの特徴もそれぞれ違い，おのおのに最適な弁証体系がある．例えば，温邪を感受した場合は，邪を上に受けてまず肺を犯し，傷津が迅速であるから，衛気営血・三焦弁証体系を用いるべきである．

3.4.2 風寒外犯による邪正相争においては，治療は祛邪安正か扶正祛邪のいずれかであり，邪を去り正を安んずるのが原則になっている．しかし，外邪の侵襲による邪正相争が，臨床的な疾病にみられる唯一の病変形式ではなく，内傷雑病などさまざまである．傷寒という病変においても，回復期で臓腑や気血津液の虚損が元に復する途上にあるときは，必ずしも邪の参与はない．この状況には六経弁証体系は適切ではない．

3.4.3 臨床各科の疾病には，それぞれに特有の発病と証治の規律上の特徴がある．例えば，婦人科には経・帯・胎・産が，小児科には麻・痘・驚・疳などがあり，六経弁証体系で対応しつくせるものではない．

上に述べたように，六経弁証体系は臨床的に広範な実際的意義をもってはいるが，他の弁証方法に取って代わることはできず，まして他の各科の疾病における発病・証治の規律的特徴を無視し，邪の有無を問わず，邪の属性と発病の特徴を究めず，一概に六経弁証体系に納入して弁治してはならない．当然のことながら，風寒外感の邪犯六経では，すでに述べたように六経病変という発病・伝変の規律的特徴をもっており，他邪の外犯による病変や他の各科の雑証とは異なっているために，六経弁証体系を他の弁証方法で代用することはできない．すなわち，六経弁証体系が独立して存在しうる根本は，風寒外犯という病機にある．

「傷寒」の概念

『傷寒論』は「傷寒」の２字で命名されており，書中にも「傷寒」の２字を冠した条文や「傷寒」の２字で命名された証型が多数見られるので，『傷寒論』を検討するうえでは，まず「傷寒」の２字のもつ意味を明確にして，概念上の混淆を避けるべきである．

1 すべての外感病の総称

『素問・熱論』：「今それ熱病は，みな傷寒の類なり」
『難経・五十八難』：「傷寒に五あり，中風あり，傷寒あり，湿温あり，熱病あり，温病あり」

『傷寒論』の命名は，この広義のものをさしている．

1.2.2 感受风寒，感而即发的疾病

《伤寒论》中主要论述的内容即系指此。以受邪性质不同，受邪途径不同，其发病之证治、传变特点不同，而强调系感受风寒而非他邪；又为区别于感寒伏而不发，与伏气温病有别，而强调感而即发，而非“冬伤于寒，春必病温”之伏而不发者。

1.2.3 太阳病证型之一

太阳病，系风寒侵袭太阳，以“脉浮，头项强痛而恶寒”命名。但由于人体素质有异，所受风寒中，所挟风邪有程度的不同，故太阳表证又因之有无汗、有汗之别。《伤寒论》条文中，特冠以“伤寒”、“中风”之名以别之。如原文：

“太阳病，发热，汗出，恶风脉缓者，名为中风”。(2)

“太阳病，或已发热，或未发热，必恶寒。体痛，呕逆，脉阴阳俱紧者，名为伤寒”。(3)

1.2.4 邪入某经，而非“某经病”之泛称

从广义上讲，感受风寒发病，邪正相争于某经，可称之为“某经病”。但《伤寒论》书中所称之“某经病”即太阳病、少阳病、阳明病、太阴病、厥阴病、少阴病，皆有其特定的病变内涵。故凡虽系邪入某经，而又不具备“某经病”之特定病变表现者，《伤寒论》条文皆冠之以“伤寒”二字。如原文：

(96)、(99)、(100)、(101)、(394) 条，论述小柴胡汤证诸条文；

(176)、(350)、(168)、(169)、(170) 条，论述白虎汤证、白虎加人参汤证诸条文

1.2.5 感受风寒，无化热倾向（或迟缓）者

感受风寒，以寒邪偏盛，无化热倾向（或迟缓）者，用以和因风邪相对偏盛，或因素体因素易于化热者对照区别。如原文：

(38)、(39) 论述大青龙汤证条文；(40)、(41) 论述小青龙汤证条文。

1.3 六经病变的概念和传变规律

1.3.1 六经病变的概念

1.3.1.1 六经病的概念

如前所述，六经是以脏腑经络为中心，对人体的部位划分，即六经为其所属脏腑及其气化功能所及，并通过经络与之相连属的部位。从广义上讲，凡外邪侵入人体六经不

2 風寒を感受してすぐに発病する疾病

『傷寒論』中の主な論述の内容はこのことをさす．感受した邪の性質や邪の侵入経路の違いにより，それぞれの病変の証治・伝変の特徴が異なるので，風寒の邪を感受した病変で，他邪ではないことを強調しておく．また，寒邪を感受し潜伏して発病しない伏気温病と区別するために，感じてすぐに発病するもので，「冬に寒に傷るれば，春に必ず温を病む」というような，伏して発しないものではないことも強調しておく．

3「太陽病」の証型の1つ

「太陽病」は，風寒が太陽を侵襲し「脈浮，頭項強痛して悪寒す」を呈する病態の命名である．さらに，人体の素質の違いと，感受した風寒のうちの風邪の程度の違いにより，太陽表証にはさらに無汗と有汗の別があり，『傷寒論』の条文では，特に「傷寒」「中風」の名を冠して両者を区別している．

「太陽病，発熱し，汗出で，悪風し，脈緩のものは，名づけて中風となす」（2）
「太陽病，あるいはすでに発熱し，あるいはいまだ発熱せず，必ず悪寒し，体痛み，嘔逆し，脈陰陽ともに緊のものは，名づけて傷寒となす」（3）

4 邪が某経に入ってはいるが，「某経病」ではないものの汎称

広義には，風寒を感受して発病し，某経で邪正相争が生じているものを，「某経病」と称してよい．ただし，『傷寒論』中の「某経病」すなわち「太陽病」「少陽病」「陽明病」「太陰病」「厥陰病」「少陰病」は，それぞれ特定の病変内容をもっている．それゆえ，邪が某経に入ってはいるが，「某経病」の特定の病変内容を備えていないものには，『傷寒論』の条文では「傷寒」の２字を冠している．原文は，例えば以下のようなものである．

小柴胡湯証の（96）（99）（100）（101）（394）などの諸条文．

白虎湯証・白虎加人参湯証の（176）（350）（168）（169）（170）などの諸条文．

5 風寒を感受し化熱の傾向がない（あるいは遅い）もの

風寒を感受し，寒邪が偏盛で化熱の傾向がない（あるいは遅い）ものを，風邪偏盛か素体の素因のために化熱しやすいものと，対照し区別している．原文は，例えば以下のようなものである．

大青竜湯証の（38）（39）の条文．

小青竜湯証の（40）（41）の条文．

六経病変の概念と伝変規律

1 六経病変の概念

1.1 六経病の概念

六経は臓腑経絡を中心にした人体部位の区分であり，所属する臓腑とその気化機能の及ぶ所ならびに経絡によって連属する部位に相当する．広義には，外邪が人体の六経という異なる部位に侵入して邪正相争し，当

同部位，邪正相争，该部位的生理功能被干扰，所导致的病理变化（病变、病证）称之为六经病。如邪正相争于太阳部位，即当称之为太阳病；于少阳部位，即当称之为少阳病……于少阴部位，即当称之为少阴病

但《伤寒论》所称之"某经病"，即太阳病、……少阴病，都有其特定的病变内涵，即都以其某些有特征特性的病变表现而命名。而于《伤寒论》所述条文内容中，有些病变虽系邪入某经，邪正相争于某经部位，但因其不具备"某经病"之特定病变表现，此等条文《伤寒论》则不冠以"某经病"，而皆代之以"伤寒"二字冠之。

如少阳病和柴胡证，二者虽都系邪入少阳部位所变见之病变，但其概念不同。少阳病以"口苦，咽干，目眩"之特定病变表现，以提示邪入胆府，木火上炎之机而命名；而柴胡证虽亦为邪入少阳部位所变见之病变，但系风寒之邪散漫于半表半里之间，邪正相争少阳枢机不利，碍及气、火、水之布散转输所致，以其病机特点不同，故其有关条文不冠"少阳病"，而冠"伤寒"

至于有关《伤寒论》所称之"某经病"之特定的病变内涵，可从《伤寒论》各篇中后世医家称之为提纲见证的条文得到启示。如原文：

"太阳之为病，脉浮，头项强痛而恶寒"（1）

"阳明之为病，胃家实是也"（180）

"少阳之为病，口苦，咽干，目眩也"（263）

"太阴之为病，腹满而吐，食不下，自利益甚，时腹自痛，若下之，必胸下结鞕"（273）

"少阴之为病，脉微细，但欲寐也"（281）

"厥阴之为病，消渴，气上撞心，心中痛热，饥而不欲食，食则吐蛔，下之利不止"（326）

六经各篇中都各有"××之为病"之条文，就古汉语文法分析，其述文中以"之"字，用其取消句子独立性，有待下文作答；"为"字则为动词，作引起、成为解，说明"××之为病"之后述内容，可视为"××病"的特定病变内涵。

1.3.1.2　六经病只是六经病变的部分内容

六经病虽是邪入六经，邪正相争的重要病变内容，但邪入六经不同部位所引起的病理变化，多种多样，病变表现也非止一端。而这些多变多彩的病变，却非"有特定病变内函"的六经病所能尽括纳入，而只是六经病变的部分内容。故为了全面、系统地论述外感疾病的发病、证治、传变规律，《伤寒论》除在论述六经病脉证并治的同时，还收入了大量冠以"伤寒"的条文。这些冠以"伤寒"的条文和冠以"六经病"的条文一样，都是六经病变的重要内容，都是探讨构成六经辨证体系不可缺少的内容

1.3.2　六经病变的传变规律

风寒之邪，邪从外受，自外向内深入。"六经"各部位虽各具有自身生理功能特点，但由于人体是一个统一的整体，互为影响。故风寒之邪外犯，可因其素体因素、包括

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com